

岩崎 唯花（いわさき・ゆいか） 湘南白百合学園高等学校2年
作品名 強く生きる
読んだ作品 『沈黙』

「パードレ。ゆるしてつかわさい。わしは弱か。わしはモキチやイチゾウんごたつ強か者にはなりきりまっせん。」

『沈黙』に登場する、司祭らを日本へ上陸させておきながら役人にその身を銀と交替に差し出した男、キチジローのこの言葉を目にした時、私は深く安心した。信じるもののために命を投げうつ者たちが多く描かれる本作品において、信じるものを貫くことよりも自分の命を優先する彼を、少なくとも私は、人間らしいと感じたからだ。

私が初めて、日本におけるキリスト教の歴史に触れたのは、小学五年生の社会の授業でのことだった。その時深くは学ばなかった私は、なぜキリスト教を禁じるのかもわからなかったし、絵踏というやり方でキリスト教信者を見つけようとした徳川幕府に対しても、無茶ではないか、という感想しか抱かなかった。絵を踏んで命が助かるのであれば、信者であろうがなかろうが踏めば良いだろうと。キリスト本人を踏むわけではないのだ。そんなことならば誰だって踏むはずだ。信者ではない振りをして踏めば良いと考えた私は、それを踏まずに処刑されていった人たちが馬鹿に思えて仕方なかった。

高校生になって宗教の授業で再びキリスト教禁教の歴史に触れた私は、多くのキリシタン大名や日本二十六聖人について学んだ。しかし、やはりなぜ自分の命に替えてもキリスト教を信仰するのか、そしてなぜそれを隠せないのか、わからなかった。そんな時、アントニー・デ・メロの『心の詩』に触れた。

「何もかも投げうって死さえも厭わないほど価値のある宝が見つかったときにこそ人は本当の意味で生きる」

きっとこれが信仰のために命を捨てた人々の信仰を守った理由の一つなのだろう。彼らにとって殉教は本当の死ではない。本当の死とは、信仰を捨てたことを表す絵踏のときなのだろう。しかし、私にはわからない。今まで十六年間生きてきて、何かを深く信仰する機会もなかった上、もしそのような宝があったとしても、私は迷うことなく命を優先するはずだ。たとえ本当に生きている意味があると思えなくても、私は肉体的な苦痛よりかは断然精神的な死の方が受け入れられる。

キチジローもそうだったのではないだろうか。有事のとき、神に助けを求めるくらいには彼は神を信じている。それでも、度重なる絵踏の中で、彼は全て言われたように絵を踏み、絵に唾を吐きかけた。

読者として、ロドリゴと同じ視点から彼を見たとき、私は彼を嫌悪した。しかし、私が同じ時代に生きたクリスチャンだったとしたならば、私は確実に踏んだ。そして、それと同じ選択をした者は実際多数いただろう。

信仰を守る強さから見れば、私たちは弱いのだろう。しかし、それだって人の生きる道だ。

そんな自分を受け入れて生きてゆく人だって生きる強さを持ち合わせているのではないのだろうか。信仰の道を歩むことだけが、踏絵を踏まずに苦しみに耐えてパラインに行くことだけが、本当の意味で生きることではない。苦しみに耐えられず、信仰の道をおりて、新たな自分を受け入れて新たな道を歩むこと。その道だって、私が本当の意味で生きることなのだ。

『沈黙』は、主人公ロドリゴが、転んで自分が憎んでいた新たな道を、キリストと共に歩んでいく覚悟を述べて物語が終わる。私には、その覚悟こそが、人間に最も必要な、最も尊いものにした。